

# 國學院大學學術情報リポジトリ

遺跡の特色を活かした野外催事の効果と課題：  
歴史再現「加冠の儀」の試み

|       |                                                                                                         |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2025-03-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 宮永, 一美<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002001406">https://doi.org/10.57529/0002001406</a>                   |

# 遺跡の特色を活かした野外催事の効果と課題

## —歴史再現「加冠の儀」の試み—

Effects and issues of outdoor events that take advantage of  
historical sites; Attempt at historical reenactment of  
“Kakan no gi” (Coming of age ceremony)

宮永 一美

MIYANAGA Kazumi

### はじめに

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館（以下、「博物館」という。）は、国指定特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡（以下、「遺跡」という。）のゲートウェイ施設として令和4年10月1日に開館した新しい博物館である。令和6年3月には待望の北陸新幹線敦賀延伸開業を迎え、新たな来館者のニーズに応えるべく展覧会・教育普及事業を企画し、同年5月に遺跡と博物館展示を結ぶ催事として、「戦国儀式再現 加冠の儀」を開催した。これは永禄11年（1568）4月に、朝倉義景が烏帽子親（後见人）となり朝倉当主館で行われた足利義昭の加冠（元服式）を再現する試みである。

遺跡での歴史再現催事は、見学者にとって遺跡の特色と朝倉氏の歴史の理解を深める効果が大きいと考えるが、本稿では、その効果と課題を整理しながら、遺跡と博物館を取り巻く社会的環境の変化と歴史再現催事の意義について考えてみたい。

## 1 遺跡の沿革と博物館を取り巻く環境

### （1）遺跡の発掘調査・整備の歩み

本遺跡は戦国大名朝倉氏が一乗谷に築いた城下町の跡で、5代百余年にわたり越前の政治文化の中心として栄えた場所である。昭和42年に発掘調査が始まり、昭和46年には山城跡を含む約278haが国の特別史跡に格上げ指定され、以来、半世紀以上にわたり調査が続けられている。昭和56年には出土した考古資料を収蔵・展示するため福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館（以下、「資料館」という。）が建てられ、平成3年には4つの庭園跡が国の特別名勝となり、平成19年には出土品のうち2,343点が重要文化財に指定された。用地買収し公有地化された約29haについては、発掘調査の後、遺構保存のための史跡公園整備がなされ、現在、約15haが見学者に公開されている<sup>(1)</sup>。遺跡保護の体制は、有識者で構成する特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡研究協議会の指導の下、発掘調査・整備・研究を福井県が担い、整備後の遺跡管理・修理は福井市が行ってきた。また草刈りや清掃など日常の修景維持は、公有地に協力した地元・城戸ノ内町の全戸で組織される社団法人朝倉氏遺跡保存会（以下、「保存会」という。）が受託している。「朝倉氏史跡公園基本構想」（昭和47年策定）の「歴史に埋もれて来た遺構をして自ら語らせる」、「つ

くりすぎない史跡環境整備」の理念に基づき、発掘調査計画・整備基本計画・保存活用計画等を策定・改訂しながら、遺跡の保存と活用が続けられてきた<sup>(2)</sup>。

## （２）博物館開館と観光需要の高まり

遺跡は城下町跡全体が良好に保存された稀有な遺跡として高い評価を得るとともに、手厚い文化財保護の施策がなされてきたが、平成16年には福井豪雨の被害を受け、資料館も浸水被災し建物の収蔵庫不足や老朽の問題が顕在化した。このような中で北陸新幹線延伸開業が大きな目途となり、新たな博物館の建設が進められることになった。平成27年に北陸新幹線金沢駅が開業した石川県でも、同年に石川県立歴史博物館をリニューアルしたように、広域交通網の整備が博物館の新設・リニューアルの契機となり、福井県でも、福井・敦賀延伸開業（令和6年3月）までに、当館（令和4年10月）に続き、福井県立恐竜博物館（令和5年7月）、坂井市龍翔博物館（令和5年6月）、越前和紙の里美術館（令和5年7月）などが次々と改修・拡充・新設開館した。

このように、現在では博物館施設の多くが地域の観光誘客の核としての役割を持ち、恐竜博物館や当館などはもっぱら福井県の観光地のひとつとして認知されているといっても過言ではない。その結果、博物館機能の柱である調査研究・収集保管・教育普及といった事業においても、計画の段階から観光キャンペーンと連動した相乗効果や話題性・集客が重視されるようになった。広大な遺跡と一体になった野外博物館としての特徴を持つ当館は、遺跡と結び付けた活用方法が求められており、本論で述べる「加冠の儀」についても、北陸新幹線延伸開業にあわせた特別展<sup>(3)</sup>の関連催事として企画した。

## （３）遺跡の活用の現状

これまでに当遺跡では国民文化祭（平成17年）や全国育樹祭（平成21年）など大規模催事が実施されてきたが、主要部分が特別史跡の範囲内となっており、遺構保存を第一義とするため活用の面ではいくつかの制約がある。まず、催事ではテントなど遺構に影響のない仮設の設営のみが認められるため、荒天時や積雪のある冬季には開催できず、天候による中止のリスクがある。遺跡内はトイレや休憩できる便益施設も少なく、近年は豪雨や夏場の猛暑など異常気象の頻度も高く、開催日程の見極めについても難しさが増している。

また、特別史跡内には大型施設が建てられないため、博物館は指定域外に建てられており、遺跡と博物館をつなぐ交通の利便性に課題がある。朝倉当主館跡と博物館は約2 km離れており、遺跡への公共交通機関としては路線バスしかないため、従来から自家用車・貸し切りバスなどでの来訪が多く、繁忙期はシャトルバスを走らせ博物館と遺跡をつないでいるが、催事ではシャトルバス増便や駐車場整理、交通規制などの手配が必要となる。遺跡催事には、以上のような天候リスクや追加手配等の課題があるが、広い史跡公園は多くの来訪者を受け入れられるということで、観光誘客を目的とした大規模催事開催の需要はますます高まっている。

## 2 遺跡の特色を活かした歴史再現

### (1) 戦国の足跡をたどる

当遺跡は、城戸や土塁・道路・溝跡などから区画、いわゆる城下町の「町割り」が読み取れるという特色がある。また、一乗谷古絵図は、江戸時代末期（弘化4年〔1847〕以降）に作成



一乗谷古絵図（当館蔵）

#### 一乗谷古絵図墨書地名一覧

| 番号 | 墨書      | 番号 | 墨書      | 番号 | 墨書                         | 番号 | 墨書        |
|----|---------|----|---------|----|----------------------------|----|-----------|
| 1  | 春日宮吉田   | 22 | 朝倉右衛跡   | 43 | 西光寺跡                       | 64 | 小林権（権）之頭跡 |
| 2  | 槽跡      | 23 | 三ツ崎     | 44 | 法万（萬）寺                     | 65 | 青木隼人正跡    |
| 3  | 魚住出雲守   | 24 | 瓜割清水    | 45 | 堀江石見守                      | 66 | 上城戸口      |
| 4  | 光林坊跡    | 25 | 前波九良兵衛跡 | 46 | 福岡三良右エ門跡                   | 67 | 平井        |
| 5  | 朝倉斎兵衛跡  | 26 | 女中屋敷    | 47 | 九ノ里                        | 68 | 新馬場跡      |
| 6  | 小淵ノ上    | 27 | 柳ノ馬場    | 48 | 安城寺跡                       | 69 | 鰐淵将監跡     |
| 7  | 下城戸口    | 28 | ニハアト    | 49 | 恩正寺跡                       | 70 | 朝倉角三吾跡    |
| 8  | 真正寺     | 29 | 南陽寺跡    | 50 | 月見山                        | 71 | 河合安芸（藝）守跡 |
| 9  | 朝倉中務大輔  | 30 | 鶴ノ塹アト   | 51 | 木蔵跡                        | 72 | 槽跡        |
| 10 | 本妙寺跡    | 31 | 赤淵大神宮   | 52 | 鷹ノ塹跡                       | 73 | 千畳ジキ      |
| 11 | 朝倉式部大輔館 | 32 | 犬ノ馬場    | 53 | 山崎長門守                      | 74 | 万畳ジキ      |
| 12 | 朝倉掃部助   | 33 | 松雲院     | 54 | 市原                         | 75 | 不動清水      |
| 13 | 江守      | 34 | 義景御墓    | 55 | 斎藤兵部大輔                     | 76 | 観音屋敷      |
| 14 | ※遊国寺跡   | 35 | 茶エン     | 56 | リンズ                        | 77 | 月見櫓       |
| 15 | ※八幡宮    | 36 | 敏景公御墓   | 57 | 氏景公/貞景公/孝景公御墓所             | 78 | 一ノ丸       |
| 16 | 朝倉権之頭   | 37 | ニワアト    | 58 | 諏訪大明神跡                     | 79 | 二ノ丸       |
| 17 | 朝倉兵庫介   | 38 | 中ノ御殿跡   | 59 | 弘化四/末年丁/吉田青木/造之書/心月寺月/泉大和尚 | 80 | 三ノ丸       |
| 18 | 蔵ヤシキアト  | 39 | 新御殿跡    | 60 | 米津                         | 81 | カ、ミイワ     |
| 19 | 弁（辨）天宮跡 | 40 | 赤淵社跡    | 61 | 門ノ内                        | 82 | 小タキ       |
| 20 | 馬出シ     | 41 | 白井兵部丞   | 62 | 槽跡                         |    |           |
| 21 | 正角      | 42 | 天正寺     | 63 | 笠場                         |    |           |

※は春日神社本による



されたものではあるが、谷幅が最も狭まったところで上城戸・下城戸を設けて仕切った城下町の中枢部を画面いっぱい描いて、80カ所以上の地名が墨書されており、文献史料で名前の確認できる朝倉一族や家臣の屋敷地・寺社の場所を比定できる。戦国時代の城下町の土地情報が色濃く伝わっていたことを示すもので、このように遺構と絵図・史料・伝承地名が結び付くことで、一乗谷であった出来事がどの場所で行われたのかがわかり、具体的にその足跡をたどることも可能である。

一例として、天文4年（1535）に公家の富小路資直が、一乗谷滞在中の出来事を和歌とともに綴った『詠三十一種和歌』<sup>(4)</sup>をあげる。資直は2月6日に京都を出発し、紫式部が歌に詠んだ塩津山を望んで旅愁に浸りながら越前に下り、一乗谷の北側の阿波賀に到着して「一乗といふ所にゆきつきて八人しけくまきるゝ事のミ有て、日ころへぬ物のつゐてに春日のおん神のミやしろとある鳥井の見え侍れハことさらにまうてんと思て、」と記した。阿波賀は下城戸の外にあって足羽川の水運によって運ばれた物資が市で売買された城下町の台所で、「一乗入江、唐人之在所」、「一乗之阿波賀在所」（『大乘院寺社雑事記』明応7年〔1498〕9月11日条）とも呼ばれ、資直は人通りの激しい賑やかな様子に驚いている<sup>(5)</sup>。資直が見た春日社は、阿波賀に鎮座する城下町の鎮守社で、古絵図では左端に「春日宮吉田」（墨書番号1）と墨書される。城下町へは春日社の前を通り下城戸口（墨書番号7）を通過し入っていくことになる。資直は当主館（朝倉氏滅亡後、館跡には松雲院（墨書番号33）という菩提寺が建てられた。）で朝倉氏の歓待を受け、「宗淳く朝倉弾正左衛門尉入道」再三度向顔之後、泉殿にて酒宴をまうけ侍し、二月晦日此花もやう々々さきて、庭よりはしめさしきの莊厳めもあやに風流なりしかハ」というように、館内の泉殿で酒宴を楽しみ、花が咲き乱れる庭の美しさ、座敷飾の豪華さに感嘆し、また別日には、「花盛に犬追物棧敷酒宴之中」というように棧敷から勇壮な犬追物の妙技を見物した。これは館前の犬の馬場（墨書番号32）、柳の馬場（墨書番号27）で催されたと考えられ、資直は「あつさ弓春も此春時津風おさまる国の花をみる哉」と詠んで朝倉氏の治政を称えており、このような当主館に隣接する馬場は単なる弓馬練習場ではなく、都人に戦国大名としての武威を誇示する場として使われていたことを読み取ることができる。

現在、館前の馬場跡は広場として芝張り整備され大規模催事に使用されているが、戦国大名の館・馬場跡が一体で広い空間のまま残されている場所は全国的にみても他に例がない。このような唯一無二の特色から、遺跡での催事には事前の知識量や興味関心の多寡にかかわらず、見学者がその場に立ち一望することで体感し伝わる効果がある。「加冠の儀」についても足利義昭が滞在した安養寺から上城戸（墨書番号66）を通り朝倉館へ御成した道筋を現地でたどることが可能であり、この歴史再現のならではの特色となる。

## （2）受動型から能動型の歴史体験へ

遺跡では解説を聞きながら見学できるガイドサービスを提供しており、長年、地元の保存会が担ってきた。また、博物館でも学芸員が案内する各種見学会を企画してきた。対面案内以外では、タブレット型や携帯端末を使った解説コンテンツを作成しており、近年は3D・CGを駆使したARVR機能つき解説アプリ<sup>(6)</sup>も提供している。利用者の関心の度合いに応じて自由選

扱できることを特徴とし、双方向性や没入感の新奇性を備えたものが次々と導入されている。これらのサービスは、歴史情報を伝える手法に有人か無人かの違いはあるが、見学者側にとっては選択肢が増えるものの、どちらも受動的見学方法といえる。このような中で、博物館が蓄積した研究成果は、博物館（学芸員）が立案し、展示主旨や歴史情報が的確に伝わるよう講座・見学会・ワークショップなどの形に作り込んで提供するものであった。しかし、インターネットが普及し情報化社会へと変化した昨今では、教育普及事業についても見学者が自らの体験し記録・発信する能動的要素が求められていると考える。

その一端として、新しい博物館では「触れて・調べて・作って」というハンズオン展示だけでなく、朝倉館の一部を原寸再現した展示室内で戦国衣装の着付け体験<sup>(7)</sup>できるサービスを提供している。利用者は1時間単位で予約をし、マニュアルを見ながら自分で甲冑や素襖・打掛などの衣装を着て、戦国大名の豪壮な建物内を見学しながら、会所や小座敷で自由に記念撮影ができるというもので、開館から2年間で約1,500人に利用されている。このような歴史的空間での特別体験は、歴史への関心があまり高くない層への来館動機と満足度向上につながるものと考えられ、一定の歴史知識を前提に展示表現されたテーマや研究成果を深く受容できなくても、博物館を感覚的に体感し楽しい思い出として記憶する効果が大きいと考える。以上のように、体験を通して展示テーマを伝える教育普及事業について創意工夫を重ねているが、当館の最大の特徴は、歴史的背景を持つ遺跡と一体になっていることであり、その広大な空間を活かした特別体験ということで、加冠をテーマとした野外催事を企画した。

### 3 戦国儀式再現「加冠の儀」の効果と意義

#### (1) 遺跡での「加冠の儀」催事構想

今回の催事は、戦国大名の目には見えない権力・武力というものがどのように表象・誇示されたのかをテーマとする特別展「戦国大名朝倉氏 武威の煌めき」に合わせて計画したもので、Ⅱ期の「馬駆ける戦国の庭」は、馬・鷹が戦国大名の武威のシンボルとして所有され、幕府や大名間の贈答儀礼で用いられていたことを紹介しながら、朝倉氏が戦国大名として最も武威を誇示した出来事として、永禄4年（1561）に越前海岸で張行した犬追物と、永禄11年（1568）の足利義昭の朝倉館御成にスポットをあてた。関連催事では、遺跡と展覧会をつなぎながら武威という展示テーマを伝えたいということで、朝倉義景が次期足利将軍の元服を取り仕切ることで武威を知らしめた、永禄11年（1568）4月21日に行われた「加冠」の再現に取り組んだ。

現代では成人式として広く浸透している行事であるが、その起源である元服・加冠については儀式の由来や作法を見聞できる機会はほとんどなく、そのような中で、國學院大學神道文化学部において平成20年から行われてきた「成人加冠式」（以下「加冠式」という。）が貴重な参考例となった。大学ホームページで詳細に報告公開されており、この情報をもとに國學院大學へ協力・指導を依頼したところ、多大な理解・協力を得て正式に「福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館と國學院大學との相互連携及び協力に関する基本協定書」を締結し、包括的連携のもとで事業を進めることとなった<sup>(8)</sup>。連携協定の対象は、以下の4項目とした。

①朝倉氏の歴史と遺跡の特徴を活かした資料調査、分析研究に関する事項

②歴史儀式の再現に関する事項

③地域の振興に係る効果的、持続的な遺跡の活用に関する事項

④その他、事業遂行のために連携及び協力が必要な事項

具体的な連携分担は、催事運営全体を博物館が担い、國學院大學は儀式の装束・道具の教材提供、装束着付け、所作等の指導を担当することとなった。また儀式再現は神道文化学部の星野光樹准教授に監修いただくこととし、遺跡での現地確認や協議を重ねた。

足利義昭の加冠については、『越州軍記』や『御成記』の記事をもとに遺跡の上で事跡をなぞらせ再現性を追究する学術的意義も見いだせるが、今回はまずは体験型催事として実施することが大きな目的であるため、國學院大學の成人加冠式を参考に、儀式の主役である足利義昭役は成人を迎える年齢（18～20歳）を参加条件に多数公募することとした。しかし、初めての試みで周知広報が行き届かない状態での公募となるため、一般公募と並行して、地域の特色を生かした研究や産・官・学協力による取り組みに積極的な福井県立大学に協力を依頼し、参加募集協力を得ることができた<sup>(9)</sup>。保存協会からも地元募集し、結果、男子・女子合わせて26名の参加となった。

## （２）足利義昭の加冠の概要と再現ポイント

ここで足利義昭の加冠について文献史料から概要を整理する。足利義秋（元服し義秋から義昭に改名）は永禄10年（1567）11月に一乗谷に入り、翌年7月までの約8カ月間一乗谷に滞在し、この間、少なくとも3回、朝倉館へ御成をしている（『越州軍記』・『朝倉亭御成記』・『朝倉始末記』）。このうち加冠の御成は、永禄11年（1568）4月21日に行われたもので、『朝倉義景亭江御成記』（前田育徳会蔵）の末尾に「公方様御元服付而御成」として杢形の座敷飾の様子が詳しく記録されている。それによると押板の絵は馬遠・牧溪筆の3幅対の唐絵で、胡銅の三具足が置かれ、もう一方には牧溪の山水図が掛かり、棚には花瓶・盆・食籠などの唐物や天皇直筆の和漢朗詠集や左伝などの典籍が飾られ、台子や箆笥にも唐物の茶道具が納められていた。また『御成記』（前田育徳会蔵）には、儀式の次第が「四月廿一日御元服之次第」として詳述され、義秋は午刻（正午ごろ）に御坐所の安養寺から板輿に乗り、小人4人、御走衆6人、御供衆・大館伊予守、御劔役・武田中務大輔らが付いて朝倉館へ御成した。安養寺から館までの12町（1.2km）ばかりの道筋には隙間なく辻固が立ち、きれいに清掃されていた。元服の装束は前もって館に用意されており、祝言の献立は足利將軍家の調理を専属で担う大草三河守によって調進された。前関白の二条晴良も御成し、朝倉義景は「管領之役被勤之」というように、加冠の儀式諸役のうち最も重要な加冠役を管領代として務めた。『永禄記』（『群書類従』第20輯）によれば、足利義輝（光源院殿）が近江坂本で元服したときに、六角定頼が管領代として加冠役を務めた前例に従い義景が務めたもので、「朝倉家においては希代の儀」であった。

このように加冠は単なる武家の通過儀礼ではなく、政治的な意味を持つ儀式であり、特に元服する人物が足利將軍の後継者である場合、やがてその人物を中心にして構築されるであろう政治的権力を示す場であった<sup>(10)</sup>。そのため朝倉氏は故実に則り大役を果たそうと、2か月前から有職故実を家職とする山科言継に加冠装束の注文と合わせて儀式作法の指導を依頼し、4



月9日によく冠・袍・御腰・大帷・指貫・下袴・檜扇の7種一式が完成し、唐櫃に入れられて越前へ運ばれた（『言継卿記』永禄11年2月8日～4月10日条）。『御成記』によれば、義景以下配膳役らはみな白直垂を着て儀式に臨んでおり、足利義満や足利義教の元服の時の諸役の装束になっている<sup>(11)</sup>。祝儀は先規のとおり3日間続き、進物についても山科言継が指示し、作法のとおり砂金・征矢・太刀・馬・馬具などが贈られた。そして義昭はすべての儀式が終わった亥刻（午後10時ごろ）に塗輿で安養寺へ還御した。

以上のような史料から読み取れる儀式次第のうち、実際に催事に取り入れ表現できる部分は限られる。催事とおして足利義昭が一乗谷で元服したという史実と、加冠という儀式、特に次期将軍候補の加冠にはどのような政治的意味があったのかについて伝えることを主旨とし、以下の点を催事企画として組み立てた。まず、開催日については、旧暦の4月21日に近い、5月18日（土）とした。義昭が滞在していた安養寺跡から朝倉館跡までの行程は、城下町の道路跡が遊歩道として整備されている部分もあることから、当時の道筋を行列し朝倉館へ御成することとした。行列は安養寺跡近くで整列し、上城戸跡を通り、重臣屋敷や町屋、門や土堀・道路跡等が立体復原されている復原町並を通り、新御殿跡へ入り朝倉氏の氏神（赤淵大明神）を参拝し、儀式会場の朝倉館前広場へ至るルートに設定した。冠を被せる加冠の儀は、館前の広場（犬の馬場跡）中央に舞台を設けて行うこととした。足利義昭役は男女26名が衣冠・正服等の装束を着て務めることから、國學院大学の加冠式での冠を被せる所要時間を参考に、朝倉義景（烏帽子親）役を3名が務める配役とした。

### （3）催事の準備と当日の次第

催事準備で最も大変だったのは装束の用意である。装束を着けての参加は総勢40名に及び、各参加者の身長・頭囲・足長に合わせて衣装・冠・浅沓・持道具を割り当て揃える作業を國學院大学神道文化部が行った。装束だけでなく儀式で用いる胡床や座礼案なども、大学の教材を借用して使用することとなった。これらはイベント用の貸衣装とは異なり貴重な本式のものであるため取り扱いを厳重にし、展示会の資料借用に合わせて美術品専用輸送車で運搬した。博物館では一時保管庫に収納し、催事前日に着付け会場となる一乗公民館に搬入した。大学から星野光樹准教授はじめ12名が前日入りし、装束のセットとリハーサル・儀式会場の確認を行った。

当日の運営体制は、博物館・國學院大学・保存協会の3者が分担した。博物館は全体進行・管理を担当し、会場設営・行列先導・観覧者受付誘導・司会進行等はイベント会社へ委託した。また行列で義昭役3名が騎乗する馬についても安全管理を含めイベント会社へ委託した。大学は午前中、参加者の着付け・所作指導を行い、午後からは行列に加わり会場へ移動し、儀式に参加した。儀式では星野光樹准教授に加冠の歴史と各装束について解説していただき、朝倉義景役の加冠所作補助、雅楽奏上と全行程の進行を大学が担った。保存協会からは甲冑を付けて行列に参加し、朝倉家臣らが義昭を供奉する形をとった他、行列の行程のうち氏神参拝について祭祀手配等を担当した。

催事当日は、午前10時に参加者・スタッフが公民館に集合し、事前説明・リハーサルを行い、参加者は11時から着付け・所作指導を受けて、12時半には出発式会場に整列した。13時に御成



遺跡の特色を活かした野外催事の効果と課題



写真1 参加者ミーティング



写真2 着付け説明



写真3 出発式 行列整列



写真4 御成行列



写真5 復原町並を進む御成行列



写真6 氏神参拝（新御殿跡）



写真7 加冠の儀会場（館前広場）



写真8 開会の辞



写真9 加冠親から冠を着けてもらう



写真10 加冠親から釵子を着けてもらう



写真11 記念撮影



写真12 記念撮影を楽しむ参加者

行列は出発し、約50人の一行で1 kmほど行進し、新御殿跡で朝倉氏の氏神に参拝し、儀式会場へと入った。14時には館前広場の舞台で全員が着座し、加冠親代表の開会の辞から加冠へと進んだ。加冠装束（男性：衣冠・狩衣・冠・烏帽子、女性：正服・常服・釵子・額当）は参加者にとって初めて着るものであり、また観覧者にとっても装束を含め儀式を見るのが初めての方がほとんどのため、儀式の途中で、それぞれ装束の特徴と違いについて解説し、足利義昭が着た衣冠と同じ伝統装束が、現在では神職の正装として受け継がれていることの説明や、足利義昭が一乗谷で元服した経緯、朝倉義景が加冠親を務めた意義について歴史解説も入れた。全員の加冠が整い、参加者代表が答辞を述べ、國學院大學学生による祝賀の雅楽奏上があり、参加者全員で記念撮影し15時終了となった。その後、参加者はチャーターバスで一乗公民館へ戻り、着替え片付けを終え、17時には解散・撤収となった。

実施にあたり最も留意した点は天候であった。当初から雨天時の場合、順延はせず会場を博物館内の朝倉館原寸再現室に変更する計画であった。晴天の場合でも、行列も含めると所要2時間以上となるため、熱中症や着なれない装束でのアクシデントを想定し対策を練った。実際、当日は快晴に恵まれたが、日差しが強く30度近い高温となったため装束を着て野外を歩くには厳しい条件となった。行列の道中には木陰や休息施設がないため、参加者には体調不良を感じた場合は早めに離脱するよう注意を徹底し、途中しっかりと水分補給の時間を取るなどの対応をとった。また装束については、汗で濡れるとシミなど汚損が発生してしまうため、終了後は



速やかに梱包・返送し、大学でクリーニング等の手入れができるように段取りした。

### おわりに ～歴史再現催事の効果と継続への課題～

ここまで遺跡の特色を活かした催事の試みについて述べてきた。初めての催事のためその効果については測りえない部分も多いが、現時点での総括をしたい。まず、歴史を題材にした野外催事は全国各地で行われているが諸事情により廃止・中止となる淘汰の時代を迎えている。朝倉氏に関連する催事でも「越前時代行列」(保存協会から朝倉武将隊が参加。2018年まで)、「越前朝倉曲水の宴」(2022年まで)が廃止・中止となり、一方で新たな野外催事が次々と開催されており、企画の類似による発信・誘客力の弱さ、乱立による集客希薄化が課題と考える。このような中では歴史再現の質や遺跡の特色を磨くことで独自性を突出させていく必要がある。

その点で今回の催事は、國學院大學神道文化部の所作指導がついたことで、多くの時代風催事とは一線を画すものとなり、初めての参加者にもかかわらず、装束を着ての笏の持ち方、檜扇の持ち方、浅沓を履いた歩き方など立ち居振る舞いが美しく整い、よくある正笏(笏を両手で正面に持つ)のまま歩くというようなことがなかった。加冠という冠を被せ掛緒を結び鋏で切るという一見簡単な所作も、実際には儀式の故実には則った所作補助がなければ形にならないものである。これまでの大学での成人加冠式でのノウハウと有職故実の研究蓄積を最大限投入する体制で可能となったものといえる。また博物館の研究成果を土台に遺跡で再現することで他にはできない独創的かつ特色ある催事を実施することができたと考える。

今回は加冠という言葉や、足利義昭が一乗谷で元服したという事跡の認知度が低く、どのような催事なのかイメージも伝わらないなかでの儀式参加・観覧募集となったため、集客の面では大成功といえなかった。しかし儀式参加者にとっては生涯一度の貴重な体験となり、今後、長く参加者からの発信が続くものと思われる。個人のSNS発信がどのように集客や遺跡・博物館の評価に結びついていくかは未知数であるが、情報過多の中で博物館広報や新聞・テレビからの広告は影響力が弱まっており、より個人の特別な体験に基づいた発信が価値を持つようになってきていると考える。そのためにも歴史再現性や独自性の特色を維持しながら催事を継続していくことが重要で、特別な実体験を多くの参加者が発信し口コミで伝えていくことで、誘客・周知効果が高まっていくことを期待する。

### 【註】

- (1) 遺跡と博物館の沿革は、『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館要覧』(2022年)の10頁からまとめた。
- (2) 近年は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡再整備等計画』(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、2021年)、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡保存活用計画』(福井市、2024年)などが新たに策定・改訂された。
- (3) 特別展「戦国大名朝倉氏 武威の煌めき」は、Ⅰ期「源氏物語と戦国武将」(R6.3.9～4.14)、Ⅱ期「馬駆ける戦国の庭」(R6.4.27～5.26)、Ⅲ期「蹴鞠と庭が語る戦国」(R6.7.13～9.1)の3期連続の展覧会で、加冠の儀はⅡ期の催事として開催した。

- (4) 本資料は、大和の国人の十市遠忠がまとめた歌書で、公益財団法人前田育徳会所蔵である。十市遠忠が、越前に下向する富小路資直に旅行中の詠歌などを送ってほしいと頼み、自身の和歌といっしょに合綴した。遠忠の歌書については、武井和人『十市遠忠和歌典籍の研究』（武蔵野書院、2020年）に翻刻される。
- (5) 阿波賀は一乗谷で最もにぎやかな場所で、公家の清原枝賢も見物を楽しむほどであった（『天文十二年記』）。
- (6) 「戦国時空伝一乗谷まち歩き」<https://sengoku-jikuden.pupu.jp/ichijodani-navigationapp/tutorial/introduction.php>
- (7) 「戦国衣装着付け体験」<https://asakura-museum.pref.fukui.lg.jp/event/archives/51>
- (8) 当初、協力を求めるにあたっては、國學院大學副学長太田直之教授の多大な御高配・御助言をいただいた。また包括連携協定締結には、大学のエクステンション事業課から多大な御協力をいただいた。改めて記して感謝申し上げる。
- (9) 福井県立大学には参加募集にあたり多大な協力をいただいた。事前リハーサルが十分にできない中で、参加者の身体サイズ聴取や、儀式を進行するための代表となる配役選定が必要であったが、一般募集のみでこれらの事前準備は難しく、大学での募集・参加者取りまとめにより進めることができた。大学から特別な御高配をいただいたことを、ここで記して心より深謝申し上げます。
- (10) 武家の元服については、牧野信之助『武家時代社会の研究』（刀江書院、1943年）、二木謙一『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館、1985年）、同『中世武家の作法』（吉川弘文館、1999年）、森茂暁「足利将軍の元服―足利義満より同義教に至る―」『福岡大学人文論叢』（35号、2003年）。
- (11) 山岸裕美子「「白直垂」の装いからみる武家の意識―鎌倉時代から室町時代へ―」『お茶の水史学』（59号、2016年）。

（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館学芸員）